第 36 回大阪大学野田村サテライトセミナー
書道でつながる人と地域
―「復興といわない復興支援」の可能性―

2016 年 2 月 11 日(祝)、大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムのもと開設された「大阪大学野田村サテライト」にて、「第 36 回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。今回は『河合書道教室』の先生である京都大学の河合直樹先生と教室をサポートされてきた久慈広域観光協議会の谷地希美さんにお越しいただき、お話ししていただきました。『河合書道教室』は 2012 年 10 月から 2015 年 3 月まで毎月 1 回開催されてきました。今回のセミナーには、その書道教室に参加されている村民の方が、たくさん参加してくださいました。

お話は、河合書道教室の誕生の秘話から始まりました。河合書道教室は、チーム北リアス現地事務所長の貫牛利一氏が「一時的、一方的な支援ではない、新たな活動として書道教室を野田村で開いてくれないか」と河合先生に依頼されたことがきっかけだそうです。

教室を毎月 1 回開催していく中で、河合先生は、被災地である野田村で、参加者の方が書道に集中されている様子や楽しまれている様子に感動されたそうです。また、回を重ねていく中で、「私達はお客さまではありませんから」という声が聞かれ、事前準備や後片付けを生徒のみなさん自身がやっていただけるようになっているそうです。

サポートされてきた谷地さんは、野田村の近くに住んでいても被災地と距離を感じていたそうですが、書いている時は、被災している、被災していないといった立場が関係なくなり、距離が縮まる、つながると感じたそうです。また、参加者の方が準備してくれたり、片付けてくれるようになり、村民が運営側に立つようになったことに頼もしさを感じているとお話しされました。活動当初 2 年生だった生徒が 5 年生になり、新しい友達を連れてきたりと、子ども達の成長を感じて、うれしく思われているそうです。

書道教室を通じて、世代を超えた交流や、村民同士の学びあいや教えあいが生まれ、人と人のつながりが生まれていると感じ、河合先生は新しい支援の形として「復興といわない復興支援」が必要ではないかと考えられたそうです。

また、書道教室の特徴として、参加者が主体となって書道と相互交流を楽しむ場になっていること、被災者、被支援者という意識はなく、多様な人が参加しており、これまで他のイベントでは顔を見せなかった村民が集まる機会になっていると述べられました。

このような場は、一見すると復興と関係がないように思われる活動が，住民の主体的な参加を自然に促し，互いに知り合う機会のなかった住民同士を結び付け，結果的に被災地の内発的復興を支援できていると、河合先生は述べられました。

生徒のお１人であるご婦人は「津波に襲われ九死に一生を得て、震災後、初めて半紙に向かって書いた時の感動が忘れられません。津波前と同じ生き方ではいけないと思い、生きることについて考えました。なにかやり遂げたいと思い、蘭亭序（らんていじょ）を今年の元旦から取り組んでいます。」とお話しされました。また、小学生の生徒さんは「友達と一緒に書くことが楽しかった。だんだん集中して書けるようになった。」と感想をお話してくれました。

河合先生は、書道教室について「静寂と躍動が見られる場である」、「野田村に文化を持ってきてくれた」と声をかけられ、本当にうれしかったと締めくくられました。